

英語進行形の凍結機能

WATANABE, Yutai / 渡辺, 宥泰

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

89

(開始ページ / Start Page)

31

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

1994-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004580>

英語進行形の凍結機能

渡 辺 宥 泰

I

1.0. 英語進行形を論じた書はすでに膨大な数に上っている。しかも毎年多数の興味深い論文が文献目録に加えられていく。しかし研究の量的拡大はこの文法形式の基本的な意味・機能の解明に必ずしも結び付かず、むしろ問題の複雑さを再認識させる結果になっているとさえ言えよう。進行形は極めて日常的な形式であるが、日常的であるがゆえにその用法は多岐にわたり、体系的・包括的な説明が与えにくいという一面がある。例えば以下に見る進行形の用法はいかに解釈すべきであろうか。

- (1) I remember speeding down a highway through a snowstorm with some friends, late at night; the car skidded and swerved, and suddenly we were crashing through a guardrail and the car was tumbling down a gully. When it came to a rest, we looked around at one another....
—B. Greene, *American Beat*

初めに進行形の基本的意味としてしばしば言及される二つの特徴—持続と非完結性—を取り上げ、その論旨の確認とともに(1)への適用の可能性を検証することにする。


1.1.1. 一般に進行形は「持続」(duration)を表すとされる。例えば(2)の単純過去形が特定の行為があった事実を文字通り単純無色に伝えているのに対して、(3)~(5)の進行形はその行為が持続していたことを示している (Palmer 1987²: 36)。

- (2) He walked to the station.
(3) He was walking to the station.
(4) When I met him, he was walking to the station.

(5) He was walking to the station at ten this morning.

この特徴には Sweet (1898: 97-98) 以来、進行形を論じるほとんどすべての文献が触れていると言ってよい¹⁾。なお(3)を例にとると、いずれは駅に到着してしまうので歩くという行為が永遠に続くわけではない。よって「持続」は正確には「限定持続」(limited duration) とするべきであり²⁾、その点を踏まえ「一時性」(temporariness) と呼ぶ学者もあることは承知の通りである。つまり記述される行為・出来事は、ある基準時を中心にその(少し)前から(少し)後まで継続しているということになる。基準時は現在進行形の場合は原則として発話時であるが、過去進行形の場合は通例(4), (5)のように副詞表現で明示される。また(6)のように前後の脈略からそれが理解されることもある。この例では執事が通りに出た時点が基準時となる。


(6) The butler bowed and walked quite slowly from the room. He crossed the hall and went out of the front door of the house into the street where Monsieur Estragon was already loading their suitcases into the boot of the small car which they owned together. —R. Dahl, *The Butler*

1.1.2. Jespersen (1931: 180) は進行形に「時間枠」(temporal frame) の効果、すなわち進行形で示される活動が他の出来事や時点を時間的に包含する現象を認めている。(6)に関して言えば、エストラゴン氏のトランクに荷を積み込むという活動が、執事が通りに出たという単純過去形の出来事 [そしてその時点] を  のように枠にはめ込むのである。この効果は限定持続の概念から派生するものと解釈されよう (Leech 1987²: 22)。

ただし、すでに多くの研究家が指摘するように、時間枠は常に成立するわけではない。例えば(7)では時の副詞句が、(8)では単純過去形の主節部分が、逆に進行形の活動に時間の枠を与えていると見るべきであろう³⁾。

(7) They were watching a football match on Sunday afternoon. —Leech 1987²: 22

(8) It rained all day. It rained as I read in my study. It rained while I was eating my dinner. It rained as I prepared for bed. —Diver 1963: 144

また(9)のような近接過去に言及する完了進行形の場合には、 と図示

せざるを得ないであろう⁴⁾。

(9) [過労で床に就いてしまった人に向かって] You've been working too hard. —Palmer 1987²: 68

1.1.3. さて(1)の二つの進行形は「限定持続」の例として説明可能であろうか。(3)～(5)の駅に向かって歩く行為や(6)の荷を積み込む行為には、確かに時間的な幅があると考えられる。脈絡からも、また日常的な経験からも、私が出合った時点 [(4)] ないし彼が通りに出た時点 [(6)] の前後数分 [あるいは少なくとも数秒] 間は活動が持続していたことが十分に推論できる。しかし(1)において、車がガードレールを突き破ったり溝に転落することは、瞬間的と理解するのが自然であろう。特に前者の「ガードレールへの激突」について言えば、客観的事実としては何分の1秒かで完結してしまう出来事であり、激突の瞬間を基準時としてそれ以前・以後もその事態が持続していたとは論理的に考えられない。むしろ単純過去形で示されている、スリップしたり (skidded) 道を逸れる (swerved) という出来事にこそ持続時間があるはずである。

1.2.1. 「非完結性」[incompletion] を進行形の基本的意味と見る研究者も多い。(10)と(11)の対照がこの特徴を端的に例証する。(10)は溺死を意味するが、(11)では溺れかけているに過ぎず、溺れるという出来事はまだ完結していない。したがって後者には、but I jumped into the water and saved him と付け加えても何ら矛盾は生じない (Leech 1987²: 20)。

(10) The man drowned.

(11) The man was drowning.

この特徴は「移行的出来事動詞」(cf. 2.1.1.) が過去時制で用いられる場合に最も明瞭に認識されるという。これは逆に言えば他の条件下では、必ずしも認識されないということであり、例えば(12)のような疑似遂行文や、(13)のような完了進行形の用法をこの特徴で説明することは困難であろう (Binnick 1991: 287)。

(12) I'm warning you to stay away from me.

(13) I've been playing cards all night with the boys (and now I just want to go home and sleep).

(14)=(3) He was walking to the station.

(15) He was walking.

また(14), (15)について, 話者が念頭に置く基準時で何らかの事情により歩行が中断されたとすると, (14)では確かに行為が完結せずに終わったことになろうが, (15)ではその時点でも歩くという行為はすでに成立している (Dowty 1972: 27)。これでは活動の到達点が明示される [ないし暗示される] か否かにより, 同じ動詞の進行形の意味が変わってしまうことになる。非完結性を基本的意味とすることにはやはり問題があると言えよう。

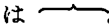
1.2.2. (1)に戻りその状況を考えると, 激突・転落が間一髪で回避できたなどということはありません, 直後に「静止すると…」とあるように事故は現実には起きている。つまり進行形で示されている出来事は, 客観的事実としては完結しているのである。非完結性が進行形の基本的意味か, それとも副次的効果に過ぎないのか, この議論はひとまず置くとしても, この脈絡で話者に非完結のニュアンスを積極的に伝える意図がないことだけは確かであろう。実際, これらの過去進行形を単純過去形に置き換えても, 事件の大意を伝達する上で大きな違いが生じることはないと思われる。

1.3.1. ここで語り (narrative) における進行形の機能に簡単に触れておきたい。物語では話の背景を成す部分 (background) が過去進行形で語られることが少なくない。一方, 話を展開していく部分—これを Hopper (1979: 213) は「前景」(foreground) と呼ぶ—には単純過去形が使用されるのが普通である。

(16) It was a lovely June day. They were haymaking in the fields and there were buttercups along both sides of the road. I was whispering along at seventy miles an hour, leaning back comfortably in my seat, with no more than a couple of fingers resting lightly on the wheel to keep her [i.e. the car] steady. Ahead of me I saw a man thumbing a lift. I touched the footbrake and brought the car to a stop beside him. —R. Dahl, *The Hitch-hiker*

麗らかな日差し, 干し草作りが行われる中の快適なドライブは, 次に描かれるヒッチハイカーを乗せるという出来事の状態説明の働きをしている。ここで注意すべきは, 状態動詞や進行形で記述される出来事—晴天, 干し草作り, 疾

走一が同時点で生起していたのに対して、単純形で語られる出来事一人の姿を目にとめ、ブレーキを踏み、車を止める一は語りと同じ順序で連続的に発生していたことである。

なお、Jespersen (1931:182-83) は進行形のこの機能を持論である「時間枠」を拡張して説明しようとしているが、すでに論じたように [cf. 1. 1. 2.] この枠自体が常に成立するわけではない。(10)において、干し草作りが単純形の出来事に対して時間枠を形成しているとの説明は可能であろうが、時速70マイルの高速巡航は、停車のためブレーキをかけた瞬間に解消したと考えるべきで、これは  と図示されよう。

1. 3. 2. (1)で語られている出来事の生起関係を整理すると、夜中に車を飛ばす→スリップする→道を逸れる→ガードレールを突き破る→溝に転落する→顔を見合わせる、となるがこれは語りの順序と同じであり、しかも時間的に重なり合っているところがまったくない。下線を施した進行形部分が、他の出来事に時間の枠をはめているわけではない。下線部も話の展開を担っており、背景ではなく前景の一部を成していると言える。

II

2. 0. 前章で述べた持続や非完結の概念、あるいは背景用法では(1)における進行形を十分説明できないことが分かった。本章ではここに使われている動詞の意味特徴とその進行形が伝える心理効果について探り、基本的意味を再考するよすがとしたい。

2. 1. 1. Leech (1987²: 23-24) は、進行形をとる典型的な動詞の類型として次の4種をあげている。

- A. 「瞬間動詞」(momentary verbs): hiccough, hit, jump, kick, knock, nod, tap, wink, etc.
- B. 「移行的出来事動詞」(transitional event verbs): arrive, die, fall, land, leave, lose, stop, etc.
- C. 「活動動詞」(activity verbs): drink, eat, play, rain, read, work, write, etc.

D. 「過程動詞」(process verbs): change, grow, mature, slow down, widen, deteriorate, etc.

まずここで明らかにしておかなくてはならないのは、A類動詞とC類動詞の分類基準である。いずれも何らかの活動を表すが、A類が持続を考えにくい程、瞬時に完結する行為・出来事に用いられるのに対して、C類は有限ではあるが持続する(going on)行為・出来事を指すとされる。C類動詞では活動を中断しても、その時点までその活動は行われていたことになるが[cf. 1. 2. 1.], A類動詞が表す活動には持続時間がないに等しいため、仮に動作を途中で止めてしまうとその活動は成立しないという特徴がある。ところが持続を進行形の基本的意味とする立場では、非持続的なA類が進行形をとるのは論理矛盾ともなり得る。そこでA類は進行形で用いられると持続の概念が付与されて、単一の動作ではなく同じ動作の反復を示すと説明される。例えば次例で猫は箱の中を一度ではなく、幾度も引っ掻いているものと解釈される。

(17) When he returned to the kitchen, the cat was scratching in her box. —R. Carver, *Neighbors*

B類動詞とD類動詞は、ある状態から別の状態への移行を表すという点では同様であるが、D類の移行が継続的であるのに対し、B類の移行は瞬間的という違いがある。B類では移行自体にはほとんどあるいはまったく持続時間がないため、進行形が用いられると移行そのものではなく、移行の瞬間への接近を示すとされる。(18)で言えば、「すべての手紙に綴りミスがある状態」にはまだなっていない。なりかかっているのである。

(18) It is getting to the point where a letter with no misspelled words is the exception. —B. Greene, *American Beat*

2. 1. 2. A類とB類は瞬間的な出来事や行為を表すという点では同じ地平にあり⁶⁾、その境界は時にあいまいになる場合がある。さらに重要なことは、進行形について Leech が特筆している特徴—A類の進行形は動作の反復を、B類のそれは移行への接近を表すとされる現象が、単純に一方のみに規定できる性質のものではないという事実である。Close (1981³: 80) は瞬間的活動を表す例として close (a book), open (a door), switch on (a light) といった動詞をあげ、これらの進行形には反復的な読みしかできないと述べている。しかし意味的にはこれらは明らかにB類動詞であり、例えば(19)の例は移行への接近

として解釈するしかあるまい。一方(20)の例ではB類動詞であるはずの take off の進行形が、A類と同じように反復的な活動を表している。

(19) Then he stepped to the closet and was opening it when the knock sounded at the front door. —R. Carver, *Neighbors*

(20) At the airport, several freight aircraft were taking off noisily. —Quirk et al. 1985: 209

2.1.3. さて、(1)の動詞の意味内容を考えると、crash は紛れもなくB類動詞と判断できる [cf. 1.1.3.]。また tumble については、厳密にA類、B類のどちらに該当するか微妙な要素を含んでいるが、持続がほとんどないのは確かであり、やはり広い意味で瞬間的な動詞と見て差し支えなからう [以後、A・B類を区別する必要がない場合には、「瞬間動詞」の名称で両類を代表することがある]。しかしここで留意しなければならないのは、両動詞の進行形が(1)の脈絡では、A類、B類に特徴的とされた振る舞い方をしていない、つまり反復的動作も移行の瞬間に向けた接近もいずれも表していない点である⁶⁾。その時点で生じていた単一の出来事を記述しているに過ぎないのである。

2.2.1. Close (1981³: 20–21) は、瞬間動詞の進行形が単一の行為を指す可能性を二つ示唆している。まず一つは、(21)、(22)等を話者が極めてゆっくりと動作を行いながら発した場合である。

(21) I'm opening my book.

(22) I'm putting my pen on the desk.

しかしこれは、主語に有意志の行為者を要求する、一部のB類動詞にしか当てはまらない現象である。A類動詞や主語の意志の力が及ばないB類動詞 [die, fall, lose, etc.] の表す活動は、性質上その動作の速度を遅らせることができないからである。

2.2.2. 第二は、スローモーションで撮影された映像を記述する場合である。Langacker (1982: 282) もこれに触れているが、この場合には(23)のようなA類動詞についても適用できる。「まばたき」を構成する一つの動き、一回の目を閉じる瞬間的な動作が何倍もの持続時間に引き伸ばされるのである。

(23) Sally is blinking.

これとよく似た例がスチール写真の描写に見られる。Declerck (1991: 162) は⑭の例をあげ、これを「行為の凍結」(frozen action) と命名している。現実には瞬時に完結してしまう行為が、その動作の途上で「凍結」されてしまうことにより、話者が写真を眺めている間中（そしてその写真が存在する以上、永遠に）持続することになる。

⑭ In this photograph John is winking at the camera.

行為の凍結による解釈は実際の持続時間の有無 [長短] には無関係なので、¹ 瞬間動詞はもとより進行形をとり得るほとんどすべての種類の動詞に適用可能である。例えば⑮、⑯のように、一般の活動動詞や状態動詞の場合にも当然成立する。この点については後にまた触れることになろう。

⑮ A blown-up photograph of the father hangs on the wall of the living room, to the left of the archway....He is gallantly smiling, ineluctably smiling, as if to say "I will be smiling forever."—T. Williams, *The Glass Menagerie*

⑯ It was an old photograph depicting two young men in the uniform of the Royal Army Engineers bomb disposal unit. They were sitting astride the casing of a German 'Big Fritz' five-ton bomb."—F. Forsyth, *Money with Menaces*

2.2.3. スローモーション撮影やスチール写真の例は人工的に構築されたやや特殊な状況ではある。しかし同様の現象はごく日常的な生活レベルでも生じ得る。Osgood が26人の大学生に対して行った心理学の一連の実験結果に興味深い事例が見られる (1971: 502-06)。問題の実験は目を閉じていた被験者に一瞬、目を開けさせ、眼前に展開している光景—例えば机の上を黒いボールが転がって行き、青いボールにぶつかるという（一回限りの）出来事—を記述させるものである⁹⁾。その結果、26例中3例の記述に進行形が認められたが、そのうちの1例 [⑰] はA類の瞬間動詞を用いたものであった。この被験者にはボールの動きが微速度であるか凍結されたかに見えたということであろう。

⑰ A squash ball is hitting a blue ball and then going in opposite direction.

⑱ The small black ball rolls and hits the medium blue ball.

なお、圧倒的多数の被験者の記述は単純形であるが、そのうち9例が単純現

在形であったことは特筆に値する〔典型例を⑧に示す〕。これには事前に、「情景の見えない子供に伝えることを想定して記述せよ」との条件が課せられていたことも関係しているかも知れない。実況放送では、動きの速いスポーツ〔サッカー、ボクシング等〕には単純現在形が、動きのゆっくりとしたスポーツ〔ボート、ゴルフ等〕には現在進行形が使用されやすいとの指摘があるが⁹⁾、この実験における記述結果もその延長上にあると見られる。

III

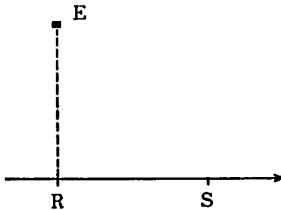
3.1.1. 議論がここまで進めば、(1)の進行形に与えるべき説明は自ずと明らかになったと思われる。話者はガードレールを突き破る瞬間および転落の瞬間で動きを凍結させたのである。「車を飛ばすこと」から始まる一連の出来事の中でも、ガードレールを破り転落したことが、最も衝撃的で最も鮮明に記憶に残った出来事であったと思われる〔cf. 1.3.2.〕。映画でよくあるように、注意が集中し緊張が頂点に達したこれら一瞬の時点で、情景がストップモーション (freeze-frame) になったと考えると分かりやすい。

このように進行形には活動のある一瞬で凍結させ、そこに注意を集中させる機能があると結論できよう¹⁰⁾。だがそれだけではない。注意が集中した部分が、凸レンズを通したようにクローズアップして見えるという副次効果が生じることがある。車がガードレールを突き破ることは、客観的事実としては瞬時に完結し、持続はゼロに近い出来事であるが〔cf. 1.1.3.〕、ガードレールを破るまさにその瞬間が拡大され、心理的には幅が知覚されるのである。これを見せかけの持続と呼んでもよいが、「見せかけ」というのはあくまで客観的な時間意識に立っての分析であることに注意したい。この効果は、客観的時間では点である「今」が、心理的時間ではある程度の範囲があるものとして意識されることに裏付けられよう。持続を表すはずの進行形が、持続のない出来事に言及するという一見矛盾する説明は〔cf. Leech 1987⁹⁾: 23〕、心理的時間を客観的時間の尺度で計ろうとする混乱の結果であろう。

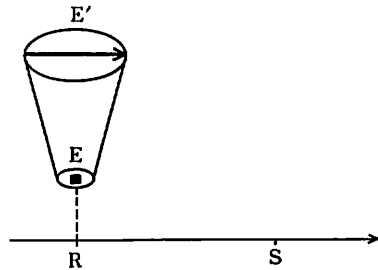
無論、瞬間的な出来事を単純過去形で描くこともできるし〔cf. 2.2.3.〕、むしろそれが普通と言ってよい。しかし(1)の話者はここにあって有標な進行形を使うことで、緊張感と臨場感を伝えたかったのだと考えられる。

3.1.2. 瞬間動詞 **crash** で表される出来事が過去時に起こったとすると、その時間関係は(29)のように図示されよう [S, R, E はそれぞれ発話時、基準時、出来事を指す]。この図は客観的時間に沿って描かれていることに注意されたい。そのため持続時間がほとんど皆無に等しいEは限りなく点に近いものとして表記されている。単純過去形によりこの出来事を記述した場合は、これまでの諸家の図解がそうであるように、この図がほぼそのまま当てはまると考えられる。

(29) “crashed”



(30) “was/were crashing”

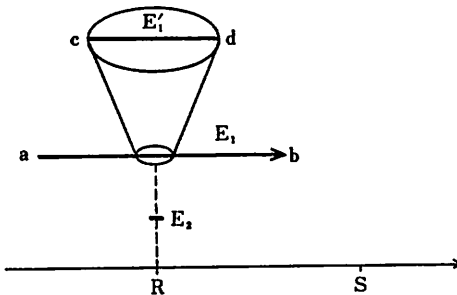


一方、(30)は過去進行形を用いて同じ出来事を記述した場合である。出来事発生の瞬間に話者【聞き手】の注意が集中していることが○で示されている。その結果、同じ出来事が心理上、幅のある出来事として知覚されていることがE'として表されている。

3.2.1. 以上の説明原理は他の進行形の用法にも適用できると信ずる。例えば一般的な活動動詞の進行形の例である(31)は、(32)のように図示できよう。

(31) He was writing when I entered.

(32)

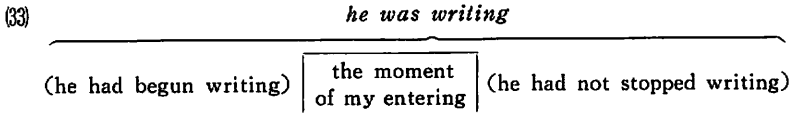


E1' = “he was writing”

E1 = 「彼の執筆」

E2 = 「私の入室」

この例と瞬間動詞の場合との大きな違いは、心理上の持続が客観的事実としても保証されているということである。ここで重要な点は、話者は書き始めた時点 a および終えた時点 b には一切関心を持っていないことである。注意を向けているのは、私の入室の時点で彼がまさに執筆の直中にあったということだけである。つまり、E_iの一点、○の部分だけを拡大しているに過ぎない。進行形の持続概念や時間枠効果を説明するのに、従来用いられてきた図解はこの点で誤解を生みやすい [cf. 1.1.2.]。例えば有名な Jespersen (1931:180) の図【33】では、枠の両端が現実の出来事 E_i の生起点・完結点 a・b を指しているかのような印象を受ける。しかし③が我々に意識させる持続は明らかに E_i の端にあたる c—d である。



3.2.2. 進行形に「二つの行為の同一性を表す」(Jespersen 1931:187) とされる用法がある。これは if [when] 節に単純形、主節に進行形を置く構造を持つと言われるが [cf. ③4], 必ずしもこの構造に限定されるわけではない【35】。

③4 Sociologist Erving Goffman uses the term *alignment* to express this aspect of framing. If you put me down, you are taking a superior alignment with respect to me. —D. Tannen, *You Just Don't Understand*

③5 The mother who absent-mindedly straightens the picture book which the baby holds upside down is usually quite unaware that she is teaching the child clues that are a part of our learned behavior. —I. C. Brown, *Understanding Other Cultures*

この種の等価表現は、③1に見たような同時性を表す用法—ある活動の過程で別の行為・出来事が生ずる—の修辭的転用、つまり時間関係の論理関係への拡張として説明されることが多い [例えば, Ota 1963:63-64, 大江 1982:96-98]。しかしこの用法も先に論じた進行形の基本機能から捉え直すことができよう。まず無色な単純形により、ごく当り前の日常的行為を提示する。次に進行形を使い、それが実は別の重要な行為の一例であったという事実に、読み手

の注意を集中させるのである。常に単純形が先で、進行形が後置される文構成に注意する必要がある。

3.3. 進行形には感情的で色彩豊かな印象があることがよく指摘される¹¹⁾。Bache (1985 : 219-20)によれば、(36)が事態を遠方から冷静に眺めているのに対して、(37)は近距離で感情を込めて記述しているという。また Kruisinga-Erades (1953⁸⁾ : 225)は、単純に事実を伝える(38)に対し、(39)では話者が衣装に目を据えて、花嫁の動きを追っているかのようだと呼んでいる。「近距離で」・「目を据えて」という表現に注目されたい。

(36) Outside the window the black trees rocked so fiercely that he thought he would be safer in than out.

(37) ...the black trees were rocking so fiercely that....

(38) The bride wore a white silk gown.

(39) The bride was wearing a white silk gown.

類例をあげておく。(40)の主人公は知る人ぞ知る町の発明家で、これから世紀の大発明となるべき機械を試験するところである。ここでも連続する進行形が情景を生き生きと描き、読者の目がそこに引きつけられていく感覚がある【瞬間動詞 *begin* の進行形にも注意】。

(40) And now he was bending forward over the machine. His head was cocked to one side in a tense, listening attitude. His right hand was beginning to turn the knob. The needle was travelling slowly across the dial, so slowly 'he could hardly see it move.... —R. Dahl, *The Sound Machine*

これらの用例が持つ臨場感が、活動凍結—注意集中の機能により引き出されていることは、もはや自明であろう。

3.4. 以上、瞬間動詞の例を手がかりとして、進行形の機能を探る一つの可能性を示した。「活動凍結と注意集中」を真の意味での基本的機能と認めるためには、これにより他の用法も適切に説明できる事実を実証せねばならない。そこでは特に習慣用法と未来用法の処遇が問題となろうが、これらについては機会を改めて論じる用意がある。

《注》

- 1) すべての研究家が「持続」を進行形の基本的意味と認めているということではない。例えば Scheffer (1975: 23), Binnick (1991: 284-85) 等は、自説展開のための批判材料として否定的にこれを紹介している。
- 2) 「限定持続」という用語は、Kruisinga (1931⁵: 346) から Twaddell (1963²: 9) を経て現在に至るまで、進行形を特徴づける概念として広く使用されている。他の研究家の記述においても特に断りがない限り、「持続」とは一定期間内の限られた持続と理解するべきである。
- 3) Jespersen 自身も、以下のように know を主節動詞にとる例に限り、進行形が時間枠に入れられる事実を認めている (1931: 184)。

...Rousseau knows he is talking nonsense...
- 4) 厳密には過去時に終了してしまった活動であっても、話者の意識においては発話時まで持続している、という説明も成り立つかも知れない。この立場に立てば、
 _____ と表示するのが適切であろう。しかしいずれの場合にも、働くことが基準時 [＝発話時] 以降も持続するというニュアンスは感じられない。
- 5) Quirk et al. (1985: 208-09) は「点的状況タイプ」(punctual situation types) として両類をまとめている。
- 6) "...the car was tumbling down a gully" の解釈について、単なる転落ではなく何度もゴロゴロと回転しながら落ちた、とする可能性も完全には否定できない。そしてこの場合には動作の反復が示されたことになろう。しかしそれは進行形により付与された意味ではなく、動詞 tumble の語彙的意味（の一部）と見るべきである。以下の例を参照。

The stones tumbled down the hill. —RHD², s.v. tumble
- 7) Quirk et al. (1985: 205-06) は、sit, stand, lie, live 等に代表される一群の動詞を「姿勢」(stance) を表すものとして、いわゆる状態動詞と動作動詞の中間に位置付けている。この種の動詞は単純形の場合には永続的狀態を、進行形では一時的狀態を表すとされる。
- 8) この実験のねらいは、関連性のある出来事を連続的に提示し、先行する出来事を知覚し認知するその仕方が、後続の出来事の記述形式にいかに関与するかを調べることにあったと推察される。したがって進行形についての我々の議論と実験の目的自体には直接の関係はない。
- 9) この傾向については Close (1962: 75-76) の指摘が最初と思われる。Scheffer (1975: 77-84) は、BBC のサッカーとボート競技の放送記録を詳細に調べ、この事実を統計的に実証している。
- 10) かつて細江 (1932: 111-12) が進行形を、「注意を一点に集中する態度を明示するもの」、「暫し熱心に心をそこに留めて陳述するもの」と規定したのは卓見である。
- 11) Sweet (1898: 97) 以来、記述機能 (descriptive function) として広く知られている。Kruisinga (1931⁵: 350-51) はこれを進行形の基本的機能として非常に重視する。

参 考 文 献

Allen, R. L. 1966. *The Verb System of Present-Day American English*. The Hague: Mouton.

- 安藤貞雄. 1983. 『英語教師の文法研究』東京：大修館.
- Bache, C. 1985. *Verbal Aspect: A General Theory and Its Application to Present-Day English*. Odense: Odense University Press.
- Binnick, R. I. 1991. *Time and the Verb: A Guide to Tense and Aspect*. New York: Oxford University Press.
- Close, R. A. 1962. 1981³. *English as a Foreign Language: Its Constant Grammatical Problems*. London: George Allen & Unwin.
- Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Diver, W. 1963. "The Chronological System of the English Verb." *Word* 19. 141-81.
- Dowty, D. R. 1972. *Studies in the Logic of Verb Aspect and Time Reference in English*. Austin: Department of Linguistics, University of Texas.
- Hirtle, W. H. 1967. *The Simple and Progressive Forms: An Analytical Approach*. Québec: Presses de l'Université Laval.
- Hopper, P. J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." *Discourse and Syntax* (Syntax and Semantics 12), ed. T. Givón, 213-41. New York: Academic Press.
- 細江逸記. 1932. 『動詞時制の研究』東京：泰文堂.
- Jespersen, O. 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part IV. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Joos, M. 1968². *The English Verb: Form and Meanings*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Kruisinga, E. 1931⁵. *A Handbook of Present-Day English*, Part II: *English Accidence and Syntax* 1. Groningen: P. Noordhoff.
- Kruisinga, E. and P. A. Erades. 1953⁵. *An English Grammar*, Vol. I, Part I. Groningen: P. Noordhoff.
- Langacker, R. W. 1982. "Remarks on English Aspect." *Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics*, ed. P. J. Hopper, 265-304. Amsterdam: John Benjamins.
- Leech, G. N. 1987². *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Ljung, M. 1980. *Reflections on the English Progressive*. Göteborg: Acta Universitatis Gothoburgensis.
- 大江三郎. 1982. 『動詞 (I) (学校英文法の基礎・第4巻)』東京：研究社.
- Osgood, C. E. 1971. "Where Do Sentences Come From?" *Semantics: An interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, ed. D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits, 497-529. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ota, A. 1963. *Tense and Aspect of Present-Day American English*. Tokyo: Kenkyusha.
- Palmer, F. R. 1987². *The English Verb*. London: Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive*

- Grammar of the English Language*. London: Longman.
- The Random House Dictionary of the English Language*. [RHD²] 1987².
New York: Random House.
- Scheffer, J. 1975. *The Progressive in English*. Amsterdam: North-Holland.
- Sweet, H. 1898. *A New English Grammar. Logical and Historical, Part II*.
London: Oxford University Press.
- Twaddell, W. F. 1963². *The English Verb Auxiliaries*. Providence: Brown
University Press.